

[別紙2]

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 姚 毅

本論文は、近代中国における出産が、他の社会に類を見ないような速度で、急速に産婆の管理する伝統的な方式から、西洋医の手による近代的な方式へと変化していった歴史を、膨大な資料によりながら、包括的かつ詳細に明らかにしたものである。

さまざまな社会史あるいは女性史の分野の中で、出産の社会史というのは、比較的蓄積の厚い分野であるといつてよい。西洋の出産の社会史や日本の産婆の変化などについては、すでにかんがりの研究がなされてきている。しかし中国に関しては、伝統的な産婆が非常に強い影響力を持っていた時代から、西洋医学がそれにとって代わるまで、わずかに数十年の時間しかなかったにもかかわらず、それを通史的に扱った研究はまったくといつてよいほど存在せず、研究上の空白のある分野であった。

そのような中で本論文は、以下のような新しい問いをたてて、その空白に挑もうとしたものである。第一に、中国では伝統的な東洋医学の力が強く、かなり精緻化された伝統医学の体系を持っていたにもかかわらず、なぜか短期間の間に、出産が西洋医学の管轄する領域へと変容したのか。第二にそうした変化にはいかなるアクターが関与し、どのようなやりとりの結果として、出産の劇的な変容が生み出されたのか。より具体的に言えば、専門家集団、国家政策、教育・免許制度、政策の実施実態、さらには受け手側の受容のしかた、といったことに着目することで何が見えるのか。これらが本論文にを通底する問題意識である。

本論文は序章、本論7章、および終章の結論部分からなる。序章では上に述べたような先行研究の展開をふまえて、近代中国の出産の社会史を追うことの意義が述べられる。西洋における出産の社会史の現況、東洋医学と西洋医学の衝突という西洋近代科学の受容に伴う摩擦に関する研究などが先行研究として意識されている。その上で産科医、助産士、旧来の産婆といった集団がどのような分業と序列を形成していくのか、それに国家権力がどのように関わったのか、なぜそしてどのようにして、出産の領域において、伝統的な産婆から西洋医学への劇的な転換が行われたのか、といった問いが提起される。

第一章ではまず近代以降急速に失われることになった伝統的産婆の世界が有するコスモロジーを再構成している。中国の伝統的出産の世界の一つの特徴は、医者が介入をしなかったことにあり、産婆によって主に取り仕切られていた。それは確かに呪術的要素を含んでいるが、決して迷信として一刀両断に否定できるものではなく、独自

の世界観を持っていたことが明らかになる。第二章では西洋の産科学・産参育知識の導入と中国人エリートのものであることに対する反応を検討している。19世紀半ばから20世紀初頭にかけて、女性医療宣教師によって、新しい消毒技術や帝王切開に代表されるような西洋の産科学が持ち込まれた。これは社会進化論と相まって受けとめられ、中国でも多くの女医が誕生し始める。第三章では出産領域における近代的医師と助産士の登場プロセス及び新式出産の状況を考察している。東洋医学と西洋医学の双方が国家による承認を求めて登録制度で綱引きを繰り返した様子などが示され、産婆の排除が、「技術の低劣さ」といった理由ですぐに行われたような性質のものではないことが明らかになる。第四章では出産の制度化・行政化の歴史的展開を時系列的に追っている。清末から民国期のさまざまな「医師条例」「産婆取締規則」、さらには1928年に全国を統一した南京国民政府の衛生行政を論じながら、国の側からの制度の変遷を概観している。第五章では助産士の誕生と産婆の内部分節化を加速させた助産教育に焦点を当てる。国立・私立の助産学校などによって助産士が大量に生み出されることになり、旧産婆による出産から新式出産への変化を担ったことが示されている。第六章では免許を持たない旧来の産婆に対する取り締まりの実態を、現在の北京を事例に貴重な一次資料を基に明らかにしている。これによって国民政府や他の地域政権における母子衛生事業が現場で具体的にどのような形で実施され、地域にどう受けとめられたかが、明らかになる。国家が助産士という新しい集団を作り出し、それがこうしたミクロな権力関係を通じて、産婆に取って代わるようになるのである。第七章では新式出産運動の受け手であった妊婦自身が、その変化をどのように受けとめ、反応していたかに光が当てられる。少なくとも30年代前半ころまでは、新式出産への抵抗は強く、その変化のプロセスは、決して上流階級の流行を下層が模倣する、といった単純なものではないことが、示されている。

終章では第七章までの議論を総括した上で、中国における出産の近代化の特徴を以下のようにまとめている。第一に中国では「産科医が男性、助産士が女性」というジェンダーの非対称性は顕著ではなく、助産士と産科医の間には競争関係ではなく協力関係があったが見られたこと。第二に受け手の妊婦たちの立場から見ると、自らの身体経験を重視し伝統的な出産介助医療を選択することがよく見られたこと。第三に東洋医学と西洋医学の競合の中で、国家が医師、助産士、産婆の序列関係に強く介入し、急激な変化を呼び起こす引き金となったこと、が提示されている。

以上のような内容を持つ本論文には、次のような長所が認められる。

第一にこの作業は、中国における出産の近代化の過程について、実証的かつ包括的に明らかにした最初の業績であり、他地域の研究が多くの研究者の積み重ねによって到達した水準にまで、ほぼ一人の力で中国の出産史の研究を引き上げている。本論文は近代中国の出産の社会史・医療史の分野で、必読の文献となることは疑いなく、その意味でこの分野におけるきわめて大きな貢献として特筆に値するものであり、この点だけをとりても学位論文としてきわめて大きな意義を持つものである。

第二にこれは中国の出産史・医療史に関するファクト・ファインディングとしても価値の高い業績であるだけでなく、それが当時どのように意味づけられていたかを医療宣教師、近代医師、伝統医師、改革派知識人、助産士さらには産婆や受け手の妊婦までの声を拾い、複雑な力関係の中で、近代の出産をめぐる言論と行為の空間がどのように変容したかを、重層的かつ動的に描き出したものであり、近代的な出産のシステムが誕生する複雑な経緯を、専門集団やその受け手のせめぎ合いの結果として描き出した点で、理論的にも価値の高い業績であると考えられる。

第三に中国の近代的母子衛生においては、「産科医は男性・助産士は女性」というジェンダー構造が形成されなかったこと、その要因として伝統中国社会における女性隔離、また東洋医学の医者が直接には出産を取り扱ってこなかったが産科をかかえていなかったために産婆を切り捨てたことなどに求めて、網羅的に明らかにしたことは、他の地域の出産の社会史にも影響を与える重要な貢献であるとともに、現代中国の産科医療や出産のあり方にも示唆を与える大変射程の長い視点である。

しかしながら、本論文にも問題点がないわけではない。まず近代や近代国家を一つのアクターとして前提としているが、それは本論文が述べるような単一の主体とみるのは難しく、modernity や nation を複数形で考え、より複層的な議論をする可能性があるのではないかと考えられる。次に医療の近代化という観点から見たときに、本論文が依拠するような西洋の医療化(medicalization)にまつわる用語系では、事態がうまく記述できず、医療の専門化(professionalization)の特異な事例として、別途用語を再定義しながら論じた方が、西洋との対比をする上では意味があったのではないかと思われる。また資料の細かい扱い方にいくつか難があり、文献の挙示方法を含めて、より注意深く処理をすることが望まれる。

しかしこれらの欠点は本論文の価値を損なうものではない。膨大な一次資料と文献を最大限に活用し、研究の空白があった分野に、単独で、これほどの大きな貢献をなしたことは、審査員一同一致して、きわめて高く評価するところであり、今後、部分的な改良を加えることで、この分野の必読文献として、出版することが期待する。

したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。